

岡村繁先生を偲んで

桐島, 薫子
筑紫女学園大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1650639>

出版情報 : 中国文学論集. 44, pp. 43-45, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

岡村 繁先生を偲んで

平成二十六年十二月二十八日、お元氣だった岡村繁先生の突然の訃報に接し、まだ、心の整理ができぬままではありましたが、謹んで、久留米大学大学院でご指導頂いた門下生を代表し、先生との思い出をたどりながら、最後のお別れを申し上げました。今回、その時の弔辞を基に、先生が門下生への激励にとお示し下さった漢詩や、久留米大学で取り組まれた公開講座のことなどを加え、改めて追悼の文を記したいと思います。

大学院の演習の講義では、江戸時代の詩人・広瀬旭荘（一八〇七—一八六三）の『梅墩詩鈔』の作品解釈に取り組みました。講義には、先生の学問やお人柄を慕い、県内外はもとより、中国からも院生が集まって来ていました。期待と不安を抱く院生たちに、先生は、旭荘の兄広瀬淡窓（一七八二—一八五六）の詩「桂林莊雜詠、示諸生四首（二）（桂林莊雜詠、諸生に示す 四首二）」をお示し下さいました。今、先生のご著書である江戸詩人選集第九卷『広瀬淡窓・広瀬旭荘』に抛り、その詩をご紹介します。⁽¹⁾

休道他郷多苦辛

同袍有友自相親

柴扉曉出霜如雪

君汲川流我拾薪

道^いうを休^{やす}めよ 他^た郷^{きやう} 苦^く辛^{しん}多^{おほ}しと

同^{どう}袍^{ぼう} 友^{とも}有^あり 自^{おの}ら相^あ親^あしむ

柴^{さい}扉^ひ 曉^あき出^でづれば 霜^{しも}雪^{ゆき}の如^{ごと}し

君^{きみ}は川^{せん}流^{りゆう}を汲^くめ 我^{われ}は薪^{たきぎ}を拾^{ひろ}わん

(訳)

塾生たちよ、「他郷ではつらいことが多い」などと弱音は吐くまいぞ。一枚のどてらを貸したり借りたりしながら

ら共に厳しい寒さをしのいでこそ始めて友だちというものができ、かくして自然と互いに親密になってくるものだ。ところで今朝、東の空が明けそめるころ、柴のしおり戸をあけて外に出てみると、まるで雪のように一面真っ白に霜が降りているが、さあ、君は小川の流れて水を汲みに行きたまえ、私は林に薪を拾いに行こう。

演習での先生のご指導は厳しく、発表者をはじめ、受講生は、皆、緊張していました。一息ついた時は、お茶と和菓子を用意しながら、先生のお話を聞くのが、とても楽しみでした。お菓子代は、いつも先生が出して下さいました。ところが、ある時、「お菓子を食べ過ぎた！」と、先生がおっしゃったので、講義の後、私たちは話し合い、次回からは配る個数を決め、残った分は先生が見えない所に置いておくことにしました。お菓子が大好きでいらした先生には、大変申し訳ないことをしてしまいました。先生には、いつまでも健康でいて頂きたい。」皆、そのように思っていたのです。

現在、中国古典の学びを広く社会に向けて発信していくことは、非常に重要になっていますが、当時から、岡村先生は大学の講義のみならず、一般の方々を対象にした公開講座でもお話をされてきました。例えば、一九九二年には、文学部長としてご多忙中、「九州学を樂しむ」を主要テーマとする公開講座で「広瀬旭莊の漢詩」という講座名でお話をされています。岡村先生の公開講座には多くの方々がお出でになり、熱気を帯びた会場からは、たくさん質問が出ました。先生は一つ一つの質問に丁寧に答えておられました。そして、講座の後、「勉強して良かった。」とおっしゃっていました。

このように先生は「勉強する」という言葉を、よくお使いになっていたように思います。そして同時に「勉強する」姿勢も、私たちにお示し下さいました。それは例えば、幾多のご著書や論文の他、「労を惜しまず原典に戻って調べる。」というお言葉や、先生が原稿用紙に書き込まれた一文字一文字から、染み入るように伝わってくるものでした。

私たちは、良き師に巡り逢えてほんとうに幸せでした。今後、先生から教えて頂いたことを伝えていけるよう、一生懸命、精進して参りたいと思います。

悲しみは深くございますが、お別れに際しましては、ご生前、先生のご自宅に伺った時、帰り際には、暑い日も寒い日も、いつも玄関の外まで出て来られ、私たちが見えなくなるまで両手を大きく振って見送って下さった、あの慈愛溢れるお姿を、いつまでも思い浮かべていたいと思います。

岡村先生、有り難うございました。どうぞ、安らかにお眠り下さい。

注

- (1) 岩波書店、一九九一年、五七～五八頁。
- (2) この他、岡村先生が担当された公開講座には、「江戸時代の九州の漢詩人たち」(一九九二年)、「僧大潮と近世九州の漢詩壇」(一九九三年)、「李白の生きかた」(一九九三年)、「老いは楽しく——中国古代の死生観」(一九九六年)がある(久留米大学ホームページ「公開講座バックナンバー」参照)。また、公開講座を基にまとめられた論考には、「僧大潮と近世九州の漢詩壇」(堂前亮平・狩野啓子編『九州学を楽しむ』所収、おうふう、一九九四年)一二三～一四二頁、「老いは楽しく 中国古代の死生観」(野中共平・的場恒孝編『生きることの美しさ』所収、石風社、一九九七年)一六三～一八七頁がある。

桐 島 薫 子